大和大学　研究紀要　第１巻　2015 年３月　pp.127 ～ 136

身体表現に生かせるピアノ指導法構築試論
－『ヨーロピアン・ピアノ・メソード』を用いてイメージ力を育成することを中心に－

寺　井　郁　子＊
TERAI　Ikuko

要　　旨

本研究の目的は , フリッツ･エモンツ著『ヨーロピアン･ピアノ･メソード』をピアノ指導の教材として用いることにより , 教員養成大学の学生の内面に , 豊かなイメージ力を醸成し , こどもの表現を引き出すためのピアノ指導法を築くことである。特に , 音楽的要素に関連させて , こどもが音楽を内面で感受し自然に身体化表現できるように , 教師がピアノの即興表現でその反応を引き出すための基礎となるピアノ指導法について追究する。

研究の結果 , 造形表現の知覚を基点としたカノンの歌唱 , 身体表現 , 器楽への発展的指導法 , こどものイメージをふくらませる音楽的要素としての旋律 , リズム , 音色に関する基礎的即興演奏 , 曲想をつける指導法が , 空間のイメージ化を伴う身体表現と連動した形で具体的に明確になった。これらの音楽的要素についての学びを , 教育現場で扱うリズム遊び , 楽器遊び , 即興表現の中で生かせる展開例を掲載した。

キーワード：身体表現 , ヨーロピアン・ピアノ・メソード , イメージ , 即興演奏

Ⅰ．はじめに

フリッツ・エモンツ（Fritz Emonts 1920-2002）は , ドイツで活躍したピアニスト , ピアノ教育学者であるが ,1949 年以降は大学で音楽教員の養成にも力を注いだ足跡が残っている。エモンツは、『ヨーロピアン・ピアノ・メソード』の出版以前には , 日本で 1960 年代に出版（絶版）された『エモンツ ピアノ教本２ 入門編 下』『エモンツ ピアノ教本３．多声音楽の演奏課程 上 二声の演奏』（いずれも小山郁之進 訳）が国内で現存していることを確認できたが , いずれも多声音楽の入門的学習の色合いが濃い。しかし ,『ヨーロピアン･ピアノ･メソード』は , ピアノテクニックの学習内容をさらに音楽的要素を含む身体表現へと発展させ , 園児・児童が音楽に親しみ , 歌遊びやリズム遊びの中で , こどもの表現活動を行うための基本的な即興演奏法を身に付けるのに最適のピアノ教材である。

Ⅱ．研究の目的

研究の目的

本研究は , 幼稚園および小学校教員養成課程の学生対象のピアノ教材としてフリッツ・エモンツ著『ヨーロピアン・ピアノ・メソード』を用いることにより , こどもの発達を助長する音楽的要素の習得を目指しながら , 学生がこどもの身体表現と密接に関連するピアノ奏法を修得するための指導法の構想をたてることである。

Ⅲ．イメージ化研究の理論的背景

１．音でイメージする能力の育成

ここでは、田畑八郎『音楽表現の教育学』（注 4）に紹介された，S.K. ランガーの著書『感情と形式』（注 3）に基づいて，イメージ力を育成するシンボル理論を概観する。

ランガーは，自らの著書『感情と形式』の中で「音楽の機能は感情の刺激ではなくて感情の表現なのである。さらにそれは，（中略）かれが理解するままの感覚性の形式をシンボル的に表現するものなのである。音楽は，作曲者自身の情緒の状態よりはむしろ感情に関するかれの想像力を示し，いわゆる＜内面生活に関する＞かれの知識を表現する。」と述べている。

この理論を，音楽教育現場における実践も豊富な田畑は，この「感情のシンボル理論」を音楽表現の「音でイメージする能力育成」に結びつけ以下の３項目に分類している。

（１）表現するための各構成要素（表現要素）の相互作用
（２）類似・関連した像へのイメージ化
（３）楽音による情感的意味の類似物を発見する。

各指導の展開例を提示する際に，この分類によるイメージ化の位置づけを付記した。

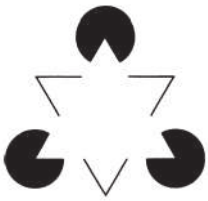
２．バイヒェル（Beichel 図注 1）による「反映」の応用

＊大和大学教育学部教育学科（初等幼児教育専攻）
平成 26 年 12 月 19 日受理

私たちは , 人間が行動する生活の中での量的な経験から , 意味が付与されシンボル化された質的な表現体験へと深めることができる。例えば , 物理的に耳に入ってきた個別的な音を繋げて , モティーフであるメロディーとして再構成し演奏したり , そのリズムや音の高低を空間的に身体表現することもできる。

このように , ある音楽表現を他の芸術［黒い線で描かれた角の三角形］に置き換えて再表現する経験 , あるいは他の芸術［黒い線で描かれた角の三角形］と融合した形での再表現する経験をすることで , 本来の音楽表現の本質［白い角の三角形］を活性化して知覚することが可能となる。この Reflexion(反映) という概念は , 単なる残像による錯視 , 学習の転移とは異なり , 表現を総合的に捉えたうえでピアノ・テクニックを習得するためには意識的に扱わなければならない概念であると考える。

＜図１＞[1)]



この Beichel の「反映」原理を念頭におきながらピアノ教材『ヨーロピアン・ピアノ・メソード』第１巻～第３巻を使用して学習することで, 身につけるべきピアノ・テクニック，そこから引き出しうる身体表現，造形表現との相乗効果と，各々の領域の独自性が明確になる。

３．音楽の要素

本研究では，小学校学習指導要領（音楽）にとりあげられている下記の要素について，音楽の身体化，楽器を使用した視覚化をはかった。

音楽の要素：音色，リズム，旋律，音の重なりや和声の響き，音階や調，フレーズなどの音楽を特徴付けている要素，反復，問いと答え，変化などの音楽の仕組み

また，これらの要素の相互作用により，イメージ化が可能となり音楽表現による感情のシンボル化のための素材となる。その結果，指導者としてのピアノによる即興表現への発展学習が可能となる。

Ⅳ．研究の方法

本研究における研究の方法を要約すると以下の２点である。

１．表現分野における総合的観点の視座については，学習指導要領と文献による理論的研究

２．音楽的要素と音楽の身体化を関連づけた指導法については , 大学の専門科目「初等音楽Ⅰ」「保育内容（表現Ⅰ）」等で得られた実践的研究

Ⅴ．研究の内容

１．鳴り響く形式そのものがシンボル化するカノン

（１）挿絵の造形表現から感得するカノン

エモンツの教本には、鏡の前にいるピアノを弾いている子どもと，その姿が鏡に映っている対称的姿の同じ子どもが描かれているページ（第１巻 pp.33）がある。これを模して，学生が身体表現した様子が次の写真①である。

（写真①）

ポリフォニー音楽の作曲技法である反進行の対位的旋律を想像することができるような綺麗なその挿絵の下に，楽譜「Little Duet(小さなデュエット)」（譜例①）がある。

（２）歌唱表現としてのカノン

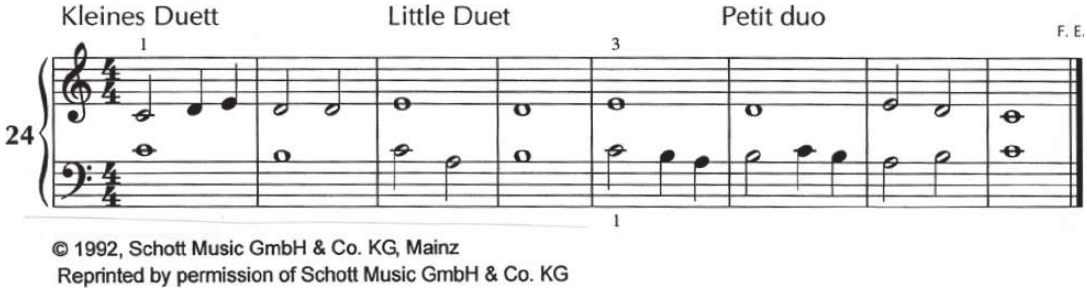
カノンは，バッハの作品から想像されるような壮大なポリフォニー音楽の導入素材としてよく用いられてきた。しかし, 動機づけとしての歌唱指導は日本音階を使った「おちゃらかほい」「だるまさん」「ほたるこい」等の親しみのある曲を使用し，歌の出発点をずらすことからも始められる。

（３）身体表現としてのカノン

クリエイティブ・ムーブメントとして，音の動きを身体の形で表現する実践を行った。エモンツの教本の教材「Little Duet(小さなデュエット)」（譜例①）を階名唱で歌った後に，右手で演奏する旋律の最初４小節を女子３人が，左手で演奏する後半４小節を男子２人が身体表現した。（写真②）反転の形になることが明確になる。

（写真②）

（譜例①）

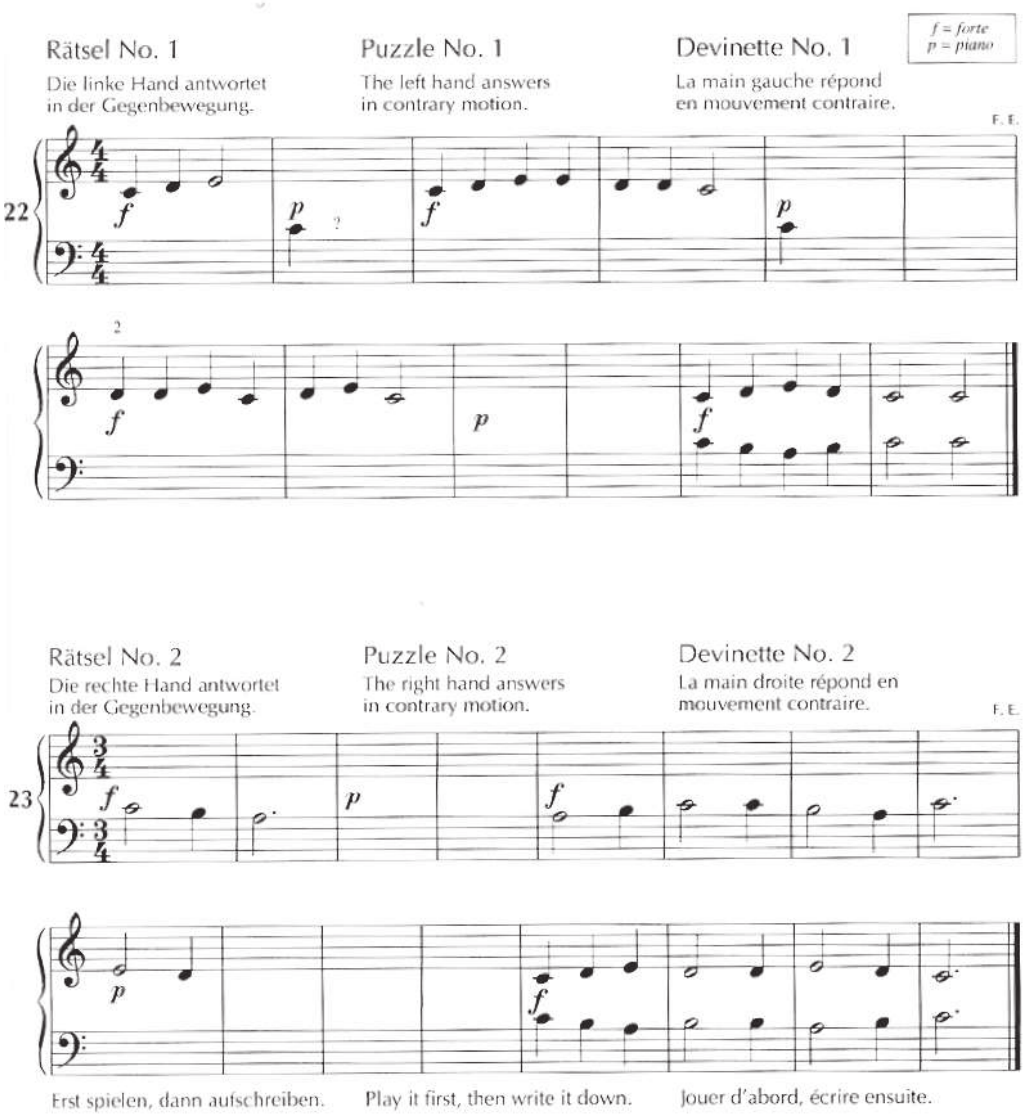


（表１）《カノン指導の展開例》⇒【類似・関連した像へのイメージ化】

※表中の“曲名”は，筆者の訳によるものである。

エモンツのピアノ教本	音楽の要素	音楽の身体化	他の　表現要素
“デュエットの謎” №22,23（譜例②）,24	音の重なり 旋律	A グループ：右手の旋律を模した動き B グループ：左手の旋律を考えた動き A と B はシンメトリー	・絵 ・グラフィックな楽譜 ・階名唱 ・ミュージック・ベル演奏を鑑賞することで，旋律イメージの視覚化

（譜例②）



© 1992, Schott Music GmbH & Co. KG, Mainz
Reprinted by permission of Schott Music GmbH & Co. KG

左手の旋律は，右手とシンメトリーの音の動きを予測し即興表現することになる。

２．こどものイメージをふくらませるためのリズム

（１）歩くことと走ることと音価（譜例③）

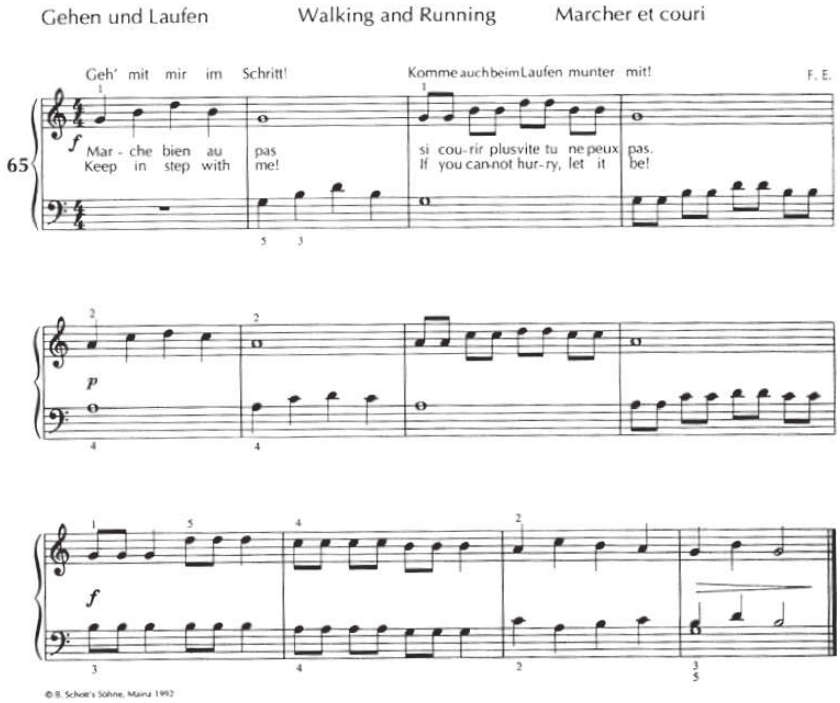
音価とは，リズムを形づくる基礎となるいくつかの単位音の長さである。例えば，４分の４拍子の場合，４分音符は１拍となり，８分音符は１／２拍である。

この音価を身体表現することによりリズムを体感し，視覚化できる。

（表２）《リズム指導の展開例》 ⇒ 【類似・関連した像へのイメージ化】

エモンツのピアノ教本	音楽の要素	音楽の身体化	他の　表現要素
“ウォーキング＆ラニング” №65（譜例③）	音価 拍子 リズム	２つの旋律の出発を１小節ずらすことを，二人の歩きと走りで表現する。４分音符はゆっくり歩き，８分音符は片足を二回ずつケンケンして小走りすることで，４分音符さらに２分割した音価であることを体感する。	大太鼓：各小節の１拍目を全音符で叩く。 中太鼓：各小節を２分割した箇所（１拍目と３泊目）を２分音符で叩く。 ボンゴ①:音の低い方（左手）を４分音符で叩く。 ボンゴ②:音の高い方（右手）を８分音符で叩く。

（譜例③）



© 1992, Schott Music GmbH & Co. KG, Mainz
Reprinted by permission of Schott Music GmbH & Co. KG

３．こどものイメージをふくらませるための音色

（１）黒鍵と白鍵の音色

ピアノの黒鍵のみで音を奏でた場合と，白鍵のみで音を奏でた場合では，その響きから受けるイメージが，大変異なる。このことは，ショパンの黒鍵のエチュードに触れるようになって初めて体験することではなく，初学者においてピアノの鍵盤の数列的な並びを視覚と聴覚で把握するためにも大切な体験である。

（２）全音階の音色

全音階には始まる音により２種類あるが，どちらも東洋的な響きであり，ドビュッシー作曲ピアノ曲「帆」等で，私たちには親しみがある。音の階段が奏でる不思議な音を体験するとともに，ペダルを踏んでピアノを演奏する最初の機会とすると，心地よいペダルリング成功体験となる。和声音楽の中でペダルを踏むと，和音が変わる瞬間より少し手前でペダルの踏み替えしなければ和音が濁って響くため，音世界の中での不快な体験となってしまう危険性がある。しかし，全音階ではこのような心配がないので，ペダルを使いながら音色を楽しむことができる。

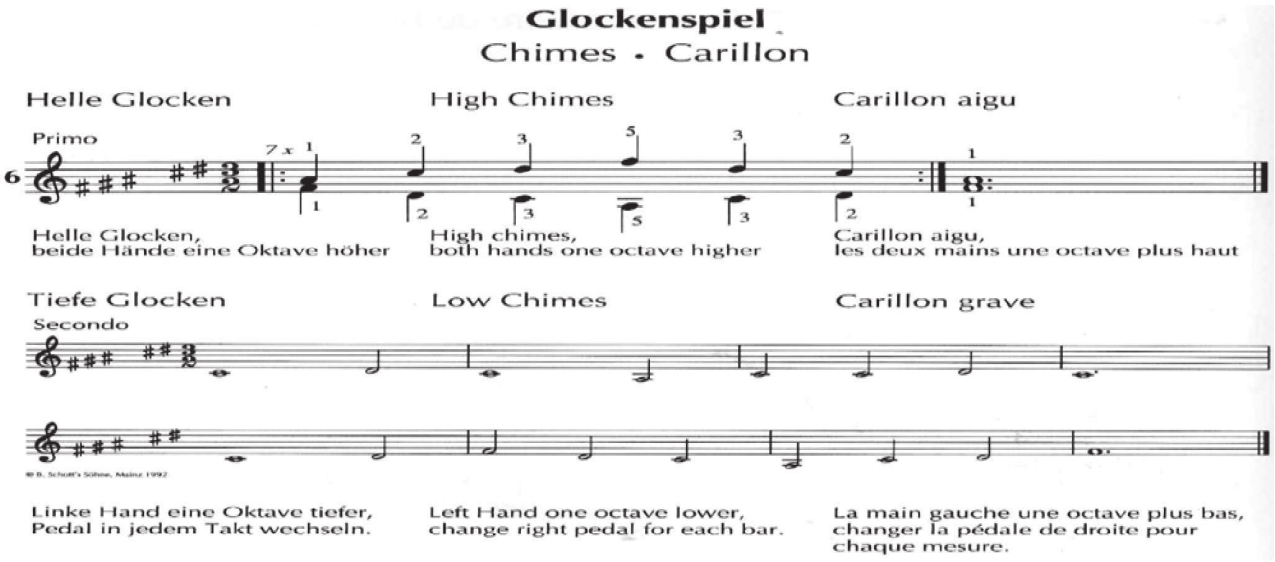
（３）６度音程の音色

６度の感覚は，１オクターブと同様にピアノ演奏上把握しておくべき手の広さと音感覚である。エモンツ教本の中では，６度音程の響きのイメージから「木靴の音」というイメージとスタッカート奏法で学習する。

（表３）《音色指導の展開例》⇒ 【表現するための各構成要素（表現要素）の相互作用】

エモンツのピアノ教本	音楽の要素	音楽の身体化	他の表現要素
黒鍵による “２つの音色のチャイム” №６（第１巻）（譜例④）	音色 音列	明るい音色（チャイムベル）と深い音色（トーン・チャイム）を「花」の様子に表現する。	・どんな花なのか言語，身体表現への置換 ・楽器による音列の視覚化 ・黒鍵の並びのシンメトリー
全音音階による作品 “宇宙のかなた”（注３） №55(第２巻)	音色 音階	宇宙にいる自分になる。	音から空間へのイメージ変換
比較演奏：半音階 ①高い音域 ②低い音域		①高い音域では，視線や手の位置が高くなる。 ②低い音域では，床に近い低い位置でゴロゴロと寝転がる。	

（譜例④）



© 1992, Schott Music GmbH & Co. KG, Mainz
Reprinted by permission of Schott Music GmbH & Co. KG

４．メロディーの声部が交替することでイメージできる２つの舞台

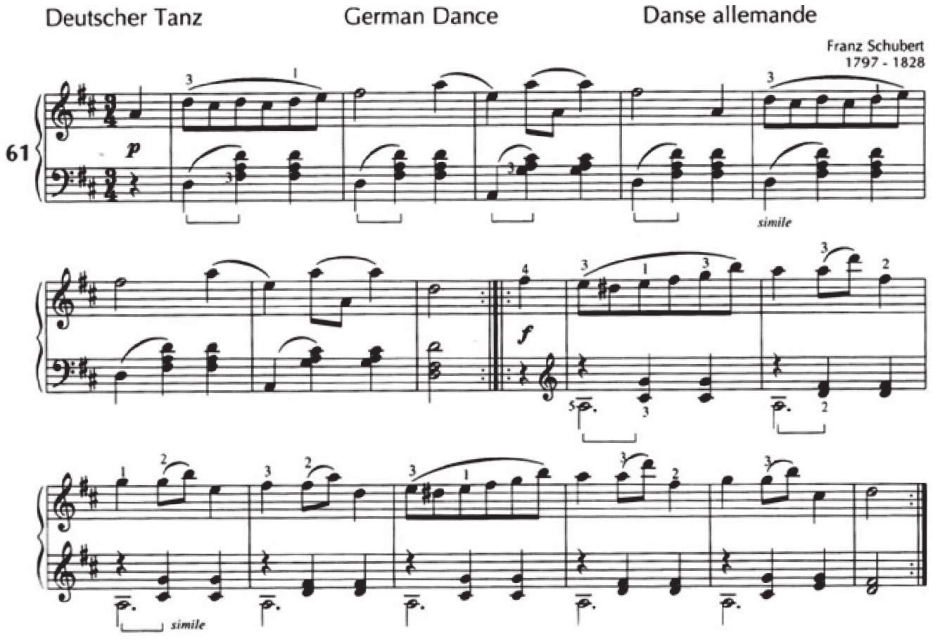
通常のピアノの学習においては，古典派からロマン派にかけて活躍したシューベルトのソナタ［例 Op.122.・D568］のレベルの学習をすると，２つの舞台があり，双方の舞台で交互に演奏していることを想像しながら演奏することがのぞまれる作品がある。

しかしながら，エモンツ教本ならば易しい曲であっても，メロディーが左手から右手に交替することで，２つの舞台をイメージしながら別の舞台から音が聞こえてくることを想像しながら学習ができる。この体験からは，器楽による表現・歌唱表現・身体表現をする際に，学習の転移が期待できる。

（表４）《空間イメージ指導の展開例》⇒【類似・関連した像へのイメージ化】

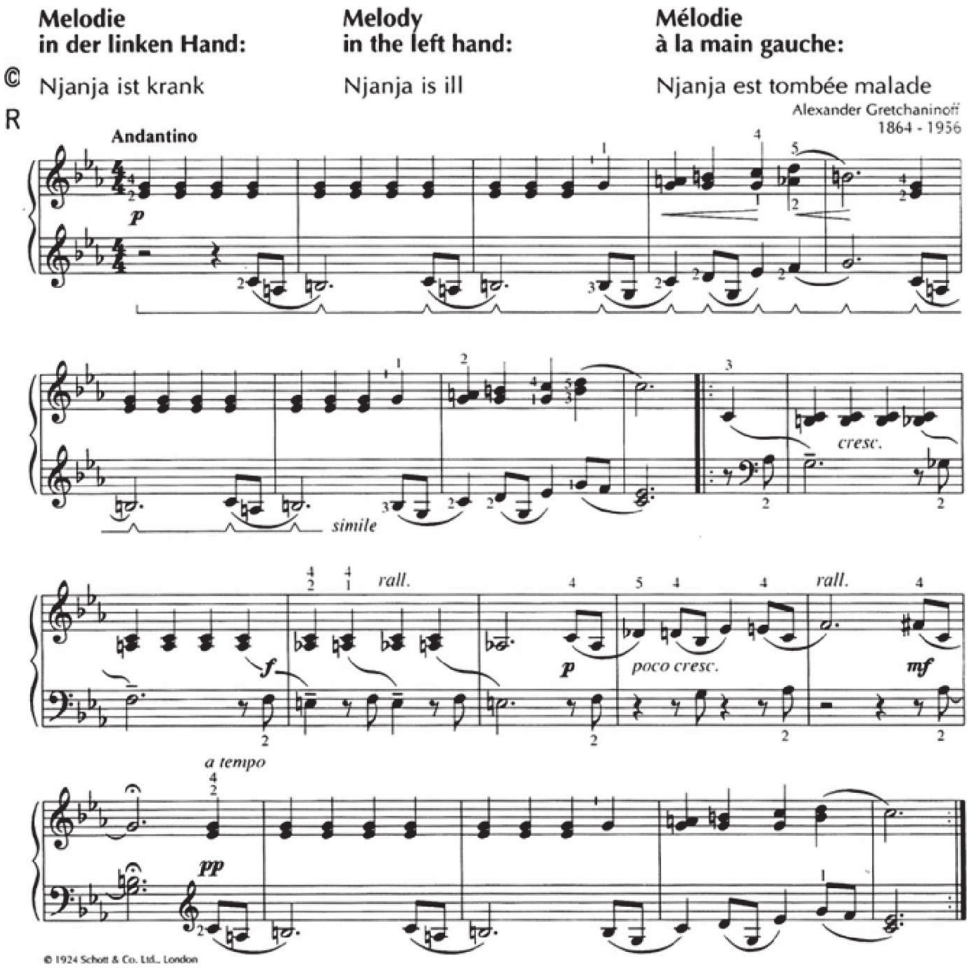
エモンツのピアノ教本	音楽の要素	音楽の身体化	他の表現要素
“ドイツの踊り”（注４） №61（第２巻）(譜例⑤)	拍子 旋律 反復	異なる二種類の振り付けをあらかじめ準備する。空間のイメージとともにアレンジする。	２場面の舞台空間構成
“つらいつらいNjanja”(注５） №67（第２巻）（譜例⑥）	拍子 旋律		舞台空間人の動きの構成

（譜例⑤）



© 1993, Schott Music GmbH & Co. KG, Mainz
Reprinted by permission of Schott Music GmbH & Co. KG

（譜例⑥）



Aus • from • de: A. Gretchaninoff, Das Kinderbuch / Childrens' Book / Livre d'enfants, Schott ED 1100
© 1924, Schott Music GmbH & Co. KG, Mainz
Reprinted by permission of Schott Music GmbH & Co. KG

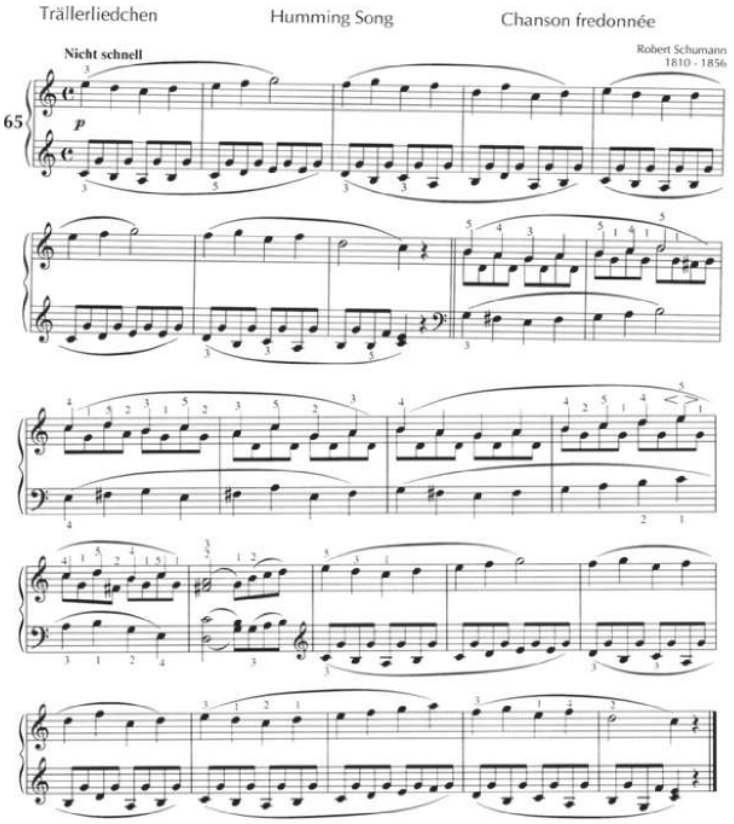
５．どのように奏でるのかという曲想

エモンツ教本では，カンタービレ，フレージング，アーティキュレーション，ペダリングのテーマについて，それぞれを学習するための専用の曲が用意されている。これまでのピアノ教本では，１曲の中にいくつもの学習課題が存在し，その生徒の習熟度とピアノ教師の熟練度に応じて，曲想に関する学習テーマについての消化すべき課題数の増減が生ずるものが多い。

（表５）《曲想指導の展開例》⇒【楽音による情感的意味の類似物を発見する】

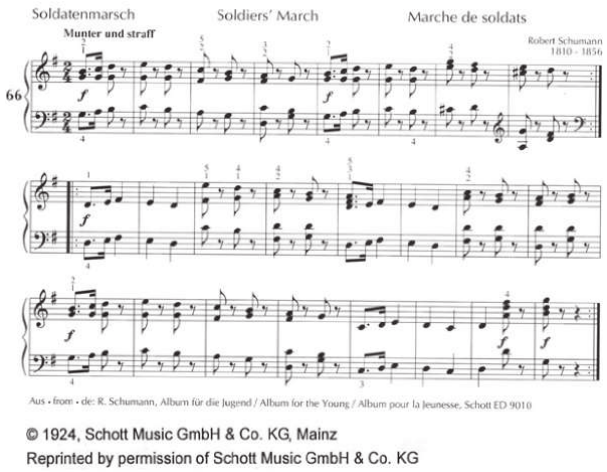
エモンツのピアノ教本	音楽の要素	音楽の身体化
“メロディー” R, シューマン作曲 №65［第２巻］（譜例⑦）	旋律 拍の流れやフレーズなどの 音楽を特徴付けている要素	なめらかな流れの身体表現
“兵士の行進” R, シューマン作曲 №66［第２巻］（譜例⑧）	旋律 リズム 拍の流れやフレーズなどの 音楽を特徴付けている要素	ゴツゴツした流れの身体表現

（譜例⑦）



© 1993, Schott Music GmbH & Co. KG, Mainz
Reprinted by permission of Schott Music GmbH & Co. KG

（譜例⑧）



Ⅵ．結論と今後の課題

フリッツ・エモンツの著書『ヨーロピアン・ピアノ・メソッド』は，初等教育教員養成課程で学ぶ学生が，こどもの内面から発する表現活動を模倣を含めて受容し，即興演奏により創造的な表現活動へと展開するためのピアノ演奏テクニックを修得するにふさわしい教材であることが，S.K. ランガーの「感情のシンボル理論」を母体とした音楽表現のイメージ力育成の観点からも明らかになった。それは，①カノンを初学者のしかも最初に楽譜の中の挿絵から歌唱・身体表現・器楽へ発展できること，②こどものイメージをふくらませるためのリズムの習得や音色の学習が豊かに盛り込まれていること，③さまざまな音世界をイメージできる音階が教材曲の中に織り込まれていること，④メロディーの声部が交替することで２つの舞台空間をイメージできること，⑤一つの曲想について充分に学習できる限定した選曲がなされていること，以上５つの理由により，ピアノ以外の手段による「表現」と密接な関係を保ちつつ，各々の「表現」の独自性を浮き彫りにする Reflexion(反映) の効果を , 現実のものとして期待できる。しかしながら，本研究では，ピアノの即興表現と子どもの身体化表現とが学習者の中で連結したという実証的な検証はまだしていない。したがって，ピアノの即興表現と，こどもの内面から人間としての音楽性を引き出す音楽の身体化表現との関連性を，さらに検証・追究することが今後の課題である。

Ⅶ．謝辞

本論文執筆にあたり，写真掲載に関して私の担当授業「保育内容（表現Ⅰ）」を履修している学生５名の快諾が得られたことを心より感謝している。

Ⅷ．注・引用文献

１． Fritz Emonts, Europäische Klavierschule, Band1,2,3 Schott Music GmbH & Co.KG,　Mainz, 1992-1994
２．『エモンツ ピアノ教本２入門編 下』(Erstes Klavierspiel ein Lehrgang) 全音楽譜出版社 , 1962、『エモンツ ピアノ教本３．多声音楽の演奏課程 上 二声の演奏』（Polyphones Klavierspiel Spiel Heft1 mit 2 selbständigen Stimmen）全音楽譜出版社 , 1965、（2 冊とも絶版）
３．S.K. ランガー『感情と形式』第３版 太陽社 ,1999 年 .pp.39
４．田畑八郎『音楽表現の教育学』第３版― 音で思考する音楽科教育― ケイ・エム・ピー　2007 年 .pp.43-45
５．Istvan Szelenyi(1904-1972) 作曲 Faraway　regions
６． Frabz Schubert(1797-1828) 作曲　Deutscher Tanz
７． Alexander Gretchaninoff（1864-1956）作曲 Njanja is ill

Ⅸ．図

１．Johann J. Beichel, Äthetische Mobilmachung, Zur Praxis und theorie der Musik und Tanztheaterimprovisation in der schule,Schneider Verlag Hohengehren GmbH,2007,ss.34-35,

Ⅹ．譜例

① Fritz Emonts, Europäische Klavierschule, Band1,2,3 Schott Music GmbH & Co.KG, Mainz, 1992-1994 vol.1.pp.33
② 前掲書 vol.1.pp.32
③ 前掲書 vol.1.pp.63
④ 前掲書 vol.1.pp.13
⑤ 前掲書 vol.2. pp.66
⑥ 前掲書 vol.2. pp.73
⑦ 前掲書 vol.2. pp.70-71
⑧ 前掲書 vol.2. pp.72

楽譜の引用については，本論文限定として，ショット・ミュージック株式会社の許諾を得ている。